

## 3-3……シュラー氏の書簡からの情報

上野 修 士 訳

Communicata ex literis D. Schull. (eri). [April 1676.]

(A VI, 3, 275-282; GP I, 131-138)

一 彼はあらゆる実体が無限で不可分割的で唯一的であることを証明する。実体とは、それ自身においてありそれ自身で概念される (conceptus) ものと彼は解する。いいかえると、その観念ないし概念が他の事物の観念ないし概念 (conceptus) から生じてこないようなものである。

二 「神」を彼は次のように定義する。「神」とは「絶対的に」無限なる存在者、すなわち無限に多くの属性からなる実体であり、それら属性の各々は無限かつ永遠なる本質を表現し、したがって

## ●印はライプニッツによる注解への訳注

★01——本テキストはライプニッツが送受信した手紙ではなく、ライプニッツがアムステルダム の医者シュラー (G. H. Schuller) から得た情報を筆写したものにさらに自身のコメントを付したもので、アカデミー版では第VI系列 (哲学著作)、第3巻 (1672-1676) に配されている。

第一節と第二節は『エチカ』草稿の第

一部定理八、一三、一四、および定義

三と定義六のパラフレーズ。第三節以降はスピノザがロデウエイク・マイエル (Lodewijk Meyer, 1629-1681) に送った、いわゆる「無限書簡」(一六六三年四月二〇日付、『スピノザ往復書簡集』書簡一二) の主要部分の写し。(デバルト版スピノザ全集では『遺稿集』の同書簡を頁の上段に、ライプニッツによる写しを下段に載せているが、若

干異なる部分がある。遺稿集は文面を

整えるために当時の編集の手が入っていると思われるので、ライプニッツの写しのほうがオリジナルの書簡をよく伝えている可能性がある)。スピノザの書簡の翻訳に関しては島中尚志訳『スピノザ往復書簡集』(岩波文庫)を参考にし、また全体にわたってイェール版羅英対訳 (The Yale Leibniz : The Labyrinth of the Continuum : Writ-

ings on the Continuum Problem, 1672-1686, Translated by Richard T. W. Arthur, Yale University Press, 2001) を参照した。

★02——すなわちスピノザ。

## 【ラテン語の注解】

●01——名辞 (terminus) ないし表現 (vox) が定義不可能なもの、ないし観念が分析不可能なものはわれわれによって「それ自身によって概念される (per se concepti)」と思われる。存在 (existentia)、「自我 (ego)」、知覚 (perceptio)、「同一者 (idem)」、変化 (mutatio)、「あるいはまた熱 (calor)」、冷 (frigus)、光 (lumen) 等々の可感的性質がそうである。だがしかし「それ自身によって知性認識される」となると、それはわれわれが他の事物すなわちその存在根拠であるような事物なしに、全要件 (omnia requisita) を概念するものに限る。というのも、普通われわれは、事物の発生 (generatio) や産出様式を概念するとき、そうした事物を「知性認識する (intelligere)」と言うからである。それゆえ、それ自身で知性認識されるものとは、もっぱら自己の原因であるようなもの、必然的なもの、つまりそれ自身を根拠とする存在者 (ens a se) のことに限られる。こうしてここから、必然的な存在者をわれわれが知性認識するならわれわれはこのものをそれ自身で知性認識していることになる、と結論してよい。ところがしかし、必然的な存在者がはたしてわれわれに知性認識されるものなのか、いやそもそも知性認識されたり、知られ (sciri)、「あるいは認識される (cognosci)」ことが可能なものなのかというところは疑うことができる。

スピノザは概念を端的に明晰 (clarus) なものと、明晰であると同時に判明 (distinctus) でもあるものとに区別する。概念はどれもみな明晰である。なぜなら人はたとえ熱を冷から区別するように、つねに或る概念を他の概念から識別しているのだから。しかしつねに

その違いの原因が何であるかがわかるほど判明かというところではない。観念 (idea)、「概念 (conceptus)」、認識 (cognitio)、「意識 (consciousness)」、知覚表象 (perceptio) 等々は結局同じものに帰着する。「意志作用 (volitio)」は、デカルトでは肯定ないし否定する能力 (facultas) のことである。

「それ自身によって概念される」とは、その概念が他のものの概念から生じないものである。或るものの状態が理解されるとき、その或るものは他のものから判然と区別されて概念されている。

事物の本質的な特性 (proprietas) は、換位的 (reciproca) であるような特性である。光、熱は概念されるが理解はされない。光や熱の特性はわれわれに知られているが、経験だけでは、たとえ知覚されても理解され証明されるわけではないのである。したがって私の考えでは、現実存在 (existentia) に関する何らかの特性——われわれ自身や「自我」自身あるいは何か他のものに関する何らかの特性——が観察 (observare) され、あるいは感得 (sentire) されはしても、証明 (demonstrare) はできない、ということが起こりうる。

およそ証明不可能なものは自同的命題 (propositio identica) か経験的事実 (experimentum) である。

何かについて複数の属性が言明され、あるいは相互に、ないしアプリオリに独立した複数の命題が言明される場合、そうした命題は経験的事実であるか、あるいは経験的事実からの帰結か、そのいずれかである。